

後藤さん 能面を復元

日本財団が助成 室町と江戸の作品



能面の型紙を手語る後藤 祐自さん（金沢市田上町）



①後藤祐自さんが復元した能面「増女」②能面「山姥」

金沢市田上町の能面

師後藤祐自さん（金沢）が、宝生流で使われる貴重な能面二面を復元した。室町時代や江戸時代初期から何度も修復を繰り返して使われてきたが、傷みが激しく、複製を制作することとなった。

今回の復元は、伝統芸能や文化を後世に伝える団体に対する日本財団（東京都）の助成事業として行われた。古くから使用されて

いる貴重な能面を修復したり、復元したりできる能面師は全国で数えるほどしかない。

今回、宝生流の依頼により後藤さんが復元したのは、室町時代の増阿弥作と伝えられる「増女」と江戸時代初期の出目満照作「山姥」。

増女は端止で憂いもたたえ、神々しさもあるため、女神として頻りに使用される。長年の使用による汗や手あかなどの染みが強く、額やあごの部分ははがれ落ちていた。

山姥は個性的な表情ゆえに頻りに使用され、裏側の傷みが激しくなっていた。貴重な能面は修復を繰り返して使うのが基本だが、修復にも限界があり、復元されることも多い。後藤さんは本物の能面から二十枚ほどの型紙を取り、その型紙をもとにヒノキから複製を削りだす。その上で、新品ではなく、能面の芸術的価値が高い状態を彩色で再現する。

後藤さんは「能面の世界は行政からの助成はあまりない。財団のおかげで、貴重な仕事ができただけではない。財団の『助成』と話している。」と語っている。（清水俊介）